

OPIの認定を受けるまでのインタビューにこれほど時間がかかるとは思っていませんでした。レベルに合う外国人もすぐに見つかるだろう、とも思っていました。ところが練習ラウンドから始めて見ると、インタビューをすると「ほしいレベルでない」というのが何回もありました。練習ラウンドで提出後、嶋田先生からのコメントで、インタビューの仕方に問題がある、とご指摘を受け、反省をし、教本を読み返してもなかなか頭に入っていきませんでした。インタビューの後に聞きなおす度に、自己嫌悪に陥りました。

OPIインタビューは何か、というのが分かり始めたのが認定ラウンドの再度やり直しのときです。超絶1人、最後のチャンス、という切羽詰った状態でした。普段話しかけたことがない中国人の教授や、FBでつながっている大学の卒業生に連絡をとり、インタビューを受けてもらいました。「やった、これで大丈夫」とスムーズにインタビューが進んでも、ロールプレイでだめだったり、良く準備して行くとインタビューがぎこちなくなってしまう物でなかったりしました。最後なので慎重にインタビューを何回も聞きなおしました。そうしているうちに、自分のインタビューの悪さが分かってきました。言葉を紡いで質問をしていくことも、最後のインタビューを通して見えてきました。全て、教本に書いてあることです。練習ラウンド、認定ラウンドのインタビューを通して教本の内容がやっと分かってきた感じです。それで、締め切り前に友人に紹介された被験者のインタビューでなんとか認定をいただきました。

インタビューをした多くの人は、私がいまだに知らない人でした。それでも理由を丁寧に伝え、快く引き受けてくれ、30分のインタビューの後に何かつながりができたようでした。被験者になってくれた学生も、廊下ですれ違おうと声をかけてくれます。

OPIのインタビューを通して大きく変わったのは、人の話をよく聞くようになったことです。私は現在大学の留学生別科で専任講師をしております。先月、欠席の多い3人の学生が相談に来ました。話を聞くと、ある講師が厳しすぎて学校に来たくない、退学をしたい、とのこと。その講師は熱心で学生を思って厳しくする人でした。いつもですと、「先生はあなたたちのことを思ってやっている。学校にきちんと来ていないのが悪い」と頭ごなしにしかってしまうのですが、とにかく学生の話をもっと聞こう、という気持ちになったのです。良く話を聞くと、こちらが言うことも分かってくれるのに驚きました。退学はせずに、続けて勉強をすることになりました。また、非常勤の講師と話するときも、まず話を聞こう、という姿勢で話すと、会話がスムーズになりました。

授業では、学生の質問はできるだけ学生が答えるようにしています。「できる日本語」を今年度から使い始めているので、OPIをそのまま授業に応用でき、その成果も見られます。国籍が違う学生間同士の関係も、例年になくうまくいっています。

多くの方々の助けがなかったら、認定は受けられませんでした。OPIは私に人とのつながりと、言葉の力を再認識させてくれました。